戦時期文化史資料

戸ノ下 達也―編・解題

厚生音楽資料全集

―戦時期の音楽文化

【全七・別巻】［復刻版／新組］

「非常時」緊急事態の帝国日本が向き合う総力戦、
音楽という文化はいかに「役立つ」のであろうか？

『厚生音楽全集』全5巻

厚生音楽とは何か、どのように実践するかを体系的に解説。
厚生音楽の実践状況、器楽や合唱の演奏や指導方法、鑑賞、作曲、楽典の基礎など、
厚生音楽の指導・実践に必要な理論・実技を、解説し補完することを目的としていた。
厚生運動が、さらに移動文化運動へと拡大していく中で、「全集」がその教則本として位置付けられ、
「全集」自体が、アジア・太平洋戦争期の社会と音楽文化の実像を反映する得難い資料となっている。

戦時期のレクリエーション運動である厚生運動は、余暇善用・体位向上を目的としながら音楽も大いに活用された。
「厚生音楽」とは戦時期特有の表象であるが、本来の全体主義的な意図を越えて、
戦後の職場文化運動や、アマチュアを担い手とする音楽の広がりに継続していくものであった。
本書では、『厚生音楽全集』と関連する小冊子からレコード会社のパンフレットも
全七巻に集成収録し、戦時期音楽のひとつの実像に迫る。
別巻では、洋楽文化史研究会会員による関連論考を掲載しさらに考察を深める。

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣

戦時期日本の娯楽政策の取組みのひとつが、
ドイツの余暇運動をモデルとして推進された
厚生運動や、大政翼賛会が主導した
翼賛文化運動である。その厚生運動は、
東京市などの行政が推進し体操・スポーツ・
ハイキングなどが実施されたが、
大日本産業報国会でも成立と同時に
音楽・演劇などによる厚生運動を推進した。
「厚生音楽」の領域では、
オーケストラの地方巡回、指定歌曲を巡回指導する国民皆唱運動、演奏家協会音楽挺身隊の歌唱指導といった、移動文化運動などが展開されたのである。

2巻

1、職場の一週間のリズム化

工場をリズム化し、明朗化し、勤労生活に活氣と潤ほひを與へることによつて勤労者の厚生と生活力保持に役立てひいては生産力擴充、能率增進、災害防止の實を擧げるには工場内へ音樂を導き入れることが最も簡易な、且つ效果的な方法であります。そして、工場内へ音樂を導入するには工場の實務に支障なく、しかも完全な形に於て實施されるレコードを使用することが最も賢明な策であります。現に、レコードを使用して非常な效果を擧げて居る工場の實例は澤山ありますが、工場に於ける産業人の勤労生活を基準としたプログラムの試案を御參考まで左に掲げます。

一、參　集
一、國　旗　揭　揚
一、國　歌　奉　唱
一、宮　城　遙　拜
一、出征將士の武運長久並戰歿將士の英靈に感謝併せて大東亞戰爭必勝祈念の爲默禱
一、體　操

一、午後の休憩

以上を工場に於ける勤労生活の行事及び休憩時の基本として一週間分のプログラムの一例を擧げてみます。（以下コロムビアレコード吹込で厚生音樂研究會編）

（月曜日）
參　集　用——朝（レコード番號三二〇二七）
國　旗　揭　揚——君が代（レコード番號A一一〇五）
註。吹奏樂の方を使用
國　歌　奉　唱——君が代（レコード番號A一一二五）
註。齊唱の方を使用
默　禱——海行かば（レコード番號三三三八六）
註。前奏だけを極く低くかける
體　操——適當なるレコード使用
行　進——兵士の合唱（レコード番號三二〇二七）
就　業　前——カッコー・ワルツ（レコード番號三二〇二八）
註。ハーモニカ合奏
午前の休憩時——カベシータ（レコード番號三二〇二八）
註。アコーデオン合奏
花と乙女（レコード番號三二〇二九）

—（72）—

2巻

（四）東京産報音樂巡回班の組織に就て

一、東京産報音樂巡回班の組織經過

昭和十七年一月九日警視廳工藝課に於て工藝課長及東京産報の關係者參集、本年度の事業計畫として事業の協議會を開催し、厚生音樂指導會も組織的に一元化することに決定し方面へ交渉協議し左の如き案を得て四月十日午前十一時三十分より日比谷公園於本樓に於て

防衛總司令部參謀陸軍中佐
藝能文化聯盟理事長
音樂挺身隊隊長
音樂挺身隊
音樂文化協會戰時對策委員會
全國音音器製造協會會長代理
日本放送協會音樂部副部長代理
警視廳工藝課課長
日蓄コロムビア、日本ビクター、大東亞、キングレコード

6巻

るへ與をび歡に人業産へ與を氣生とび潤とさる明に場職は歌

るれさ束約が上向れ生が望希ず必はにろことるあのび歡

戦時期特有の限界と戦後に継続する文化の裾野の広がりを見据える 【刊行のことば】

戦時期日本の文化には、西洋化・近代化への指向と共に、総力戦体制構築のための人々への啓発宣伝、意識昂揚、教化動員を目的とした諸相が見られます。音楽も、好むと好まざるとに関わらず、総力戦体制構築の役割を担うこととなりました。特に、1941年12月13日に情報局が発表した「戦時下国民娯楽ニ対スル緊急措置ニ関スル件」では、「音楽、映画、演劇、演芸等ノ国民文化乃至国民娯楽ニ対シテモ出来得ル限ル限リ之ヲ抑圧スルガ如キ方途ヲ避ケ進ンデ積極的指導ヲ加ヘ（中略）雄大ニシテ健全、明朗ニシテ清醇ナル娯楽ヲ與フル」と明記されていたように、政府は、娯楽政策を推進するため音楽を始めとする文化領域を重要な鍵として捉えていました。

その娯楽政策の取組みのひとつが、ドイツのクラフト・ドゥルヒ・フロイデなどの余暇運動をモデルとして推進された厚生運動や、大政翼賛会が主導した翼賛文化運動などの文化運動です。厚生運動は、東京市や大阪市などの行政が推進する体操やスポーツ、ハイキングなどが実施されましたが、大日本産業報国会も、成立と同時に音楽や演劇などによる厚生運動を事業のひとつとして推進しました。このように日中戦争期に始った文化運動は、アジア・太平洋戦争期になると「健全娯楽」推進の重要な手段として、職場や地方にも拡大していきます。音楽でも、オーケストラの地方巡回、指定歌曲を巡回指導する国民皆唱運動、演奏家協会音楽挺身隊の歌唱指導といった、移動文化運動などが展開されました。それは戦時期特有の、啓発宣伝や教化動員を目的とした取組みだったが故の限界の一方で、戦後に継続する文化の裾野の広がりという正負両面から評価すべき課題と思われます。そして同時にこれらの文化運動が戦時期に限定されたものではなく、戦時期から現在に至る日常の中でどのように息づいているのか、歴史に即して再考し、考えてみる必要があるのではないでしょうか。

これら、音楽による文化運動の理論や演奏・指導形態の解説として、アジア・太平洋戦争期には書籍やリーフレット類が出版されていました。これらの史料は、今日ではなかなか目にすることが出来ませんが、当時の時代相を如実に物語る一次史料と言えるでしょう。今回復刻する『厚生音楽全集』第1～5巻（新興音樂出版社、1942-1944年）は、厚生音楽とは何か、どのように実践するのかを体系的に解説したものです。そしてこの時期の移動文化運動としての音楽の実像を考察する史料として、ビクターやコロムビアが社内に設けた厚生音楽研究会が発行したパンフレット、移動文化運動の担い手だった清水脩や石井賢次郎の著作を別巻として補完します。さらに総目次・解題・論文集を付け加え、音楽による文化運動を再考します。

この復刻が、戦時期の社会や文化の実像を捉え直し、二度と同じ過ちを繰り返さないために、私たちが当時を想像し、受け止め、考え、次代に伝える試金石となればと願っています。

戸ノ下 達也（とのした たつや／日本近代音楽史）

日中戦争期にはじまった文化運動は、総力戦体制が深まる
アジア・太平洋戦争期になると「健全娯楽」推進の重要な手段として、職場や地方にも拡大。

◎推薦文

ごく一般のひとびとを音楽を通じて柔らかく統制する方法

長木 誠司（ちょうき せいじ／東京大学大学院総合文化研究科教授）

このたび金沢文圃閣から復刻されることになった『厚生音楽全集』は、戦前期から戦中期にかけて、「厚生運動」の名の下にどのような音楽活動が考えられ、推奨され、そして実践されてきたか、あるいは実践されようとしてきたかということを知る上で、この上ない資料である。

音楽が単なる音の遊びとしてだけではなく、知と情に訴え、さらには倫理的な影響力さえ持つということは、洋の東西を問わずに古代から主張されてきたことであるが、人間の内面に働きかけ、その情操を涵養するだけではなく、他者との連帯を生み出すという力は、使い道次第で名薬にも猛毒にもなる。もちろん、毒になったところで、口に入れるひとびとは、それを毒とは感じないところが音楽の強みである。

全体主義のなかで、思うようにひとびとを動かし、牽引していくためには、力を奮起させるだけでは足りない。労働を一定の方向に向けさせるためには、力をうまく配分して、必要なところで脱力させ、さらには休息や娯楽を与えねばならない。そうした娯楽は跳ね返って、土壇場の力へと戻ってくる。そうしたことを全体主義はうまく調整した。「厚生」とはまさに労働を生み出す秘訣である。そういうことをイタリア全体主義はうまく考えて、「労働の後で（ドーポ・ラヴォーロ）」という厚生組織を作った。ドイツのナチズムもそれを真似て、「歓喜力行団（クラフト・ドゥルヒ・フロイデ）」を組織した。そして、それをさらに真似るように日本で生じたのが厚生運動であるが、そのための大きな手段のひとつがイタリアでもドイツでも、そして日本でも音楽であった。ではこの運動のなかで、音楽になにが求められ、どのようなことが論じられ、実践に移されようとしたのか。

音楽のプロ相手ではなく、ごく一般のひとびとを音楽、それも主として西洋音楽を通じて柔らかく統制する方法、それは国家的な事業ではあるが、西洋音楽を受容してわずか半世紀ほどの日本のひとびとに、さらに幅広くそれを浸透させることにもなった。そして、こうして戦中期に形と中身ともども植え付けられたもの、それは終戦をまたぎ、国民の心や行動に沈殿して戦後へと受け継がれていったのである。

厚生音楽は本来の全体主義的な意図を越えて、戦後日本の音楽文化にまで影響していくという射程を持つことになる。しかしながら、まずはその厚生音楽の実態を把握しなければならない。その意味で、この5巻からなる豪華なシリーズはまたとない貴重な資料なのである。各図書館・研究機関をあたっても、なかなか全5巻の現物に巡り会えない稀少な資料でもあるので、今回の復刻により研究者のみならず、多くのひとの目に触れるようになることは、いろいろな意味で得がたいことだ。いや、まさにそれこそ「厚生」の意味を地で行くことなのかも知れない。

「戦時下の日常」探求に意義

古川 隆久（ふるかわ たかひさ／日本大学文理学部教授）

厚生運動とは、昭和戦時下において、生産現場における増産のために、働く人々の健康とやる気を維持増進させるための施策であった。音楽に関していえば、休憩時間に合唱したり、吹奏楽の合奏をしたりといった試みが行われた。ただし、敗戦とともに全く消えてしまったわけではない。戦後に至り、生産効率向上対策としての意味を持ったのである。つまり、厚生運動の実態を明らかにし、その歴史的意味を明らかにすることは、戦時下の歴史の探求にとどまらない意義がある。

『厚生音楽全集』、そして付録資料は、音楽産業に関わる人々が、厚生運動という国家の要請にどのように応じようとしていたか、逆に言えば、音楽が総力戦にいかに役に立つかを示そうと模索したかを知る手がかりである。そしてまた、論文集は、その模索がいかなる意味をもつものであったか、そして人々がそれをどのように受容し、戦後にいかなる痕跡を残したかを探る手がかりを提供する。この史料集は、職場における人々の「戦時下の日常」の一端を掘り起こし、歴史の上で、さらには現代のわれわれにとっての意味を考える材料として誠に貴重なものであるといえよう。

7巻

種類レコード所有状態（第二表）

一、式歌、軍歌、時局歌

業態別	レコード所有工場數	レコード枚數	一工場平均枚數	最多所有枚數	最少所有枚數	所有せざる工場	不明
染織工場	24	823	34.3	200	3	—	9
機械器具工場	24	427	17.4	75	3	—	2
化學工場	15	495	33.0	215	4	1	0
特別工場	4	66	16.5	35	2	—	0
鑛山	11	205	18.6	40	2	1	0
官營工場	0	0	0	0	0	0	0
其他	0	0	0	0	0	0	0
計	78	2,016					

二、國民歌、民謠、流行歌

業態別	レコード所有工場數	レコード枚數	一工場平均枚數	最多所有枚數	最少所有枚數	所有せざる工場	不明
染織工場	21	1,081	51.5	120	4	4	9
機械器具工場	22	270	12.3	37	1	3	1
化學工場	14	612	43.7	150	3	2	0
特別工場	3	26	8.6	15	1	1	0
鑛山	9	292	32.4	74	3	0	0
官營工場	0	0	0	0	0	0	0
其他	0	0	0	0	0	0	0
計	69	2,281					

音楽のプロ相手ではなく、
ごく一般のひとびとを
「厚生音楽」を通じて
柔らかく統制する方法

移動文化運動としての音楽の実像を
考察する史料として、レコード会社が
社内に設けた厚生音楽研究会が
発行したパンフレット、
さらに移動文化運動の担い手だった
清水脩や石井賢次郎の著作を集成。

戦　時　期　文　化　史　資　料

戸ノ下 達也―編・解題
長木 誠司／古川 隆久―推薦

アジア・太平洋戦争期、音楽が果たした役割を問う

厚生音楽資料全集

―戦時期の音楽文化

【全七・別巻】［復刻版／新組み］

―収録内容―

【第1巻】（510頁）ISBN978-4-909680-81-5
◎『厚生音楽全集』第1巻（草野貞二編、新興音楽出版社、1942年）

【第2巻】（約450頁）ISBN978-4-909680-82-2
◎『厚生音楽全集』第2巻（同上、1942年）

【第3巻】（約450頁）ISBN978-4-909680-83-9
◎『厚生音楽全集』第3巻（同上、1943年）

【第4巻】（約450頁）ISBN978-4-909680-84-6
◎『厚生音楽全集』第4巻（同上、1943年）

【第5巻】（約450頁）ISBN978-4-909680-85-3
◎『厚生音楽全集』第5巻（同上、1944年）

【第6巻】附録資料編①（312頁）ISBN978-4-909680-86-0
◎『厚生音楽と体育を語る（厚生音楽体育研究会パンフレット第2輯）』（厚生音楽体育研究会、1940年）
◎『職場と音楽（厚生音楽体育研究会パンフレット第4輯）』（同上、1941年）
◎『戦時下の生産能率と音楽（厚生音楽体育研究会パンフレット第5輯）』（同上、1942年）
◎『職場と音楽』（厚生音楽研究会、1942年）
◎『職場に音楽を採り入れる方法』（清水脩、厚生音楽研究会、1942年）
＊戸ノ下達也「『厚生音楽全集』解説」、刊行のことば、推薦文

【第7巻】附録資料編②（約330頁）ISBN978-4-907789-87-7
◎『作業と音楽』（石井賢次郎、新興音楽出版社、1943年）
◎『勤労音楽の手引』（清水脩、麹町酒井書店、1943年）

戦時期特有の、啓発宣伝・教化動員を目的とした取組みだったが故の限界の一方で、戦後日本に継続する文化の裾野の広がり、という正負両面から評価すべき課題。

造　本―B6／A5版・並製・総約3,200頁
配　本―第一回：2020年6月……1·6巻
　　第二回：2020年12月 ……2·3·7巻
　　第三回：2021年6月 ……4·5·別巻
揃　価―98,000円（各巻分売可）
　　1～5巻15,000円、6巻9,000円
　　7巻11,000円、別巻3,000円

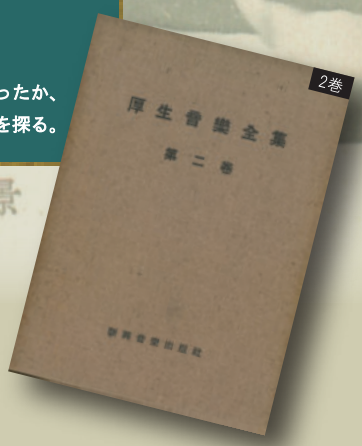
※本書、出版に際しましては、
㈱シンコーミュージック・エンタテイメントより多大なご協力をいただきました。

【別巻】（約150頁）ISBN978-4-907789-88-4
戸ノ下達也／洋楽文化史研究会編

『展開する厚生音楽―戦争・職場・レクリエーション』

青木学・寺田卓矢　「厚生音楽における楽器指導の展開―ハーモニカ、マンドリンの観点から」
三枝まり　「健全娯楽としての器楽演奏と鑑賞」
河西秀哉　「厚生音楽のなかの―湯淺永年「合唱指導法」を中心に」
上田誠二　「戦争末期・飛行機をつくる女学生たちの生活と音楽」
金志善　「植民地朝鮮の産業厚生音楽の展開―朝鮮音楽協会の国民皆唱運動の音楽巡回指導活動を事例に」
長木誠司　「日本の厚生／ドイツの厚生」
＊解題／総目次／索引

音楽による戦時期文化運動を再考し、その模索がいかなる意味をもつものであったか、
そして人々がそれをどのように受容し、戦後にいかなる痕跡を残したかを探る。



東京市内百貨店巡廻指導　厚生音樂會の一景

類縁書のご案内

『音楽文化新聞』【全三・別巻】
編・解題―戸ノ下 達也
造　本―B5判／A5判・上製函（別巻のみ並製）・総1,250頁
揃　価―82,000円

『「うたごえ」運動資料集』全六巻【並製普及版】
編・解題―道場親信・河西秀哉
造　本―A4／B5／A5／B6判　総2,112頁
揃　価―78,000円
刊　記―2020年12月一挙刊行

特別予約価格―68,000円〔2020年11月末迄にご予約の方〕

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111

□書店様へ…ありがとうございます。
直接小閣までお申し込みください。
価格は税別　051／06／4000
※図版は本書より